

革命的レーニン主義

- ◎赤色日本共産党=赤軍党万才！
- ◎「社会主義陣隊」「先進国プロレタリア軍國」「後進国民族解放戦線」の革命的結合を世界革命戦線へ！
世界革命戦争の单一司令部「赤軍インター」建設！
- ◎日本プロレタリア階級の民主主義的、民族的、愛國的、全人民的任務
一反帝社会主義統一革命戦術万才！
- ◎マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン・毛沢東万才！

赤軍党宣伝煽動局

序文

全国の赤軍兵士諸君ノ並びに赤軍兵士を志す多くの若き共産主義戦士諸君ノ我々〇〇党は、現下の権力奪取の準備と激烈な党派内戦の中に、極めて実践的にして理論的な手引きを諸君に与えたい。

六十年日米安保分断工作における民族民主主義闘争の最後的な時期は、日本帝国主義の一層の発展、日米反革命帝国主義同盟の強化、軍国主義戦争準備臨戦体制の強化を、他方における全世界人民の革命闘争の発展、社会主義諸国のプロレタリア独裁・社会主義建設の強化・革命戦争の後方陣地総要塞化、後進国民族解放戦線の徹底抗戦・人民戦争の貫徹・革命戦争への発展を媒介にして、自国帝国主義打倒・世界帝国主義打倒の全国総武装蜂起・革命戦争のスローガンによつて表現されたプロレタリア社会主義革命の時期へと発展した。その最も大きな現れこそ、一つには武装蜂起を当面の実践的最終目標とする先進国における革命党の建設であり、一つにはインドシナやアラブやラテンアメリカで見られる反帝民族解放闘争の全面的な革命戦争への発展に対する支持であり、一つにはプロレタリア階級の社会主義国人民との国際プロレタリア同盟に対する極めて階級的な自覚である。革命の敗北と戦争による新たな帝国主義同盟によつて開始された日本人民の民族的・民主主義的・愛国的・全人民的結集は、今プロレタリア社会主義革命へと発展し、前進している。しかし、多くの人々は、いまだブルジョア民主主義革命の地点に留まつたり、社会主義革命を人間主義革命に歪曲したり、社会主義革命から権力斗争を抜き取つたり、一足飛びに共産主義革命へと発展し、前進しているのである。階級闘争は、党派間の内戦において最も完成された姿となる。反革命白色日本共産党（宮本修正主義集団）が民主連合政府を呼びかけることほど滑稽なことはない。なぜなら、現実に彼ら自身がすでに帝国主義に奉仕する民主政府に参加しているし、まだそれにも増して民主政府を完成させようとしているからである。実際に、レーニン・ボルシェヴィキ党的スローガンは唯一武装蜂起である。たし、レーニンはブルジョア議会制度を廃絶

するために一時国会の演壇を利用したのであり、「議会主義」に「人民」をくつ付けたりしてもノミの一眺にも値しないであろう。また他方新左翼中間諸潮流の姿も哀れである。すでに革命党の組織問題や軍事の問題が一般化されている現在、彼らでさえも革命党の最終目標を認識しようとして努力することはするのである。彼らは、革命党の最終目標をうつすら認識したとしても、まさにうつすらしか、すなわち蜂起を哲学的に解消してしまふのである。よしんば蜂起を技術として取り扱わなければならぬと言つたとしても、その反乱の基礎である革命総路線において根本的な誤りがあるので、同じくその場限りのものとして解消されてしまうことになる。すなわち、このことは、蜂起・革命戦争の共産党建設が、最終目標を規定する政治主張・世界革命総路線の確定と、相応の実践能力にかかっているということを物語つてゐる。まさに革命戦争への発展は、現在的に蜂起の共産軍党建設にかかっているのである。インドシナやアラブにおける後進国民族解放斗争の革命戦争への発展は、後進国反帝人民の先進性をあますところなく証明すると同時に、反革命白色日本共産党（宮本修正主義集団）や新左翼中間諸潮流の國際改良分裂主義的性格を暴露したのである。なぜなら、各戦線はその統合と拡大に成功すると同時に、戦線の後方に社会主義軍隊を据え、敵帝国主義の銃後に強固なプロレタリア軍團を鍛え上げているからである。そして今や先進国プロレタリアートもこの事実に目をやり、後進国民族解放戦線から、社会主義國人民から、全世界のプロレタリア人民から学び、日本共産党（宮本修正主義集団）から新左翼中間諸潮流にいたる國際改良分裂主義の日和見主義隊列を尻目に、本能的に社会主義國際プロレタリア同盟を真剣に検討し始めている。以上の様な現実を踏まえて党派内戦は、その決戦に到るまで階級戦を赤裸々に表現するであろうし、我々はこの戦いに勝利しなければならない。

このような蜂起の共産党（「社会主義軍隊」「先進国プロレタリア軍團」「後進国民族解放戦線」）の革命的結合に基づく世界革命戦略を持った革命党）の建設とプロレタリア人民の反帝國際プロレタリア同盟は、革命戦争の急速な進展に伴つて増え革命のより有利な条件を整備しつつある。最近の日本プロレタリア人民の目は急速に海を越えた革命闘争に向けられ、すでに一国主義的閉塞に陥つてゐる全ての党派を逆手に取つた彼らは、

今こそ独自の勝利の大道を歩んでいくであろう。世界の主な傾向は、革命であり、革命の主な傾向は、人民戦争と国際的反乱である。この最も明らかな例は、チリやセイロンの民主主義革命である。これらの革命は、常にインドシナ革命戦争・アラブ革命戦争と平行して勝ちとられたのであり、次の革命的嵐の過渡をなす序幕となるであろう。

しかしながら、我々は、七十年安保粉碎闘争を中心とする六九年四月二八日沖縄本土人民連帯首都蜂起の敗北は、実践的な意味において左翼総体の口先だけの国際主義と口先だけのボリシェヴィズムを暴露したということを充分に認識しなければならない。そのことはとりもなおさず、六七年十月八日を境いとする武装闘争が、一般的な段階を通過し、権力奪取、革命戦争の現実へと発展し、全ての党派の一国主義的性格と抜き差しならぬ矛盾に陥つたということを如実に示しているのである。特に、アメリカ帝国主義軍隊に対する直接的戦闘任務を要請されていた佐世保原子力潜水艦空母駆逐作戦における無力性と自然発生性への辯証の自己批判と、その後における関西部隊を中心とする本格的な日本赤軍建設計画は、日本政治警察を、アメリカC.I.A.を、日和見主義諸党派を恐怖せしめ、この日本赤軍建設の実践的任務を前にして政治警察と軍部のボケ頭は、武器と歩兵の対内乱化を急ぎ、全ゆる諸党派は、第二戦線化、予備軍化せざるを得なかつたのであつた。しかし、赤軍内に広範に巣喰つた学生戦闘団主義や地区共闘パルチザン、サンディカリズムや赤軍をトロツキズムやブルハーリン主義やローザ主義と和解させようとする傾向一すなわち總じて赤軍内日和見主義が膨大に発生することによって、赤軍建設の課題は、一時完全な混乱と戦闘能力の低下と要員の墮落による初步的な党建設活動に歩を譲らねばならなくなつた。このことは、有利な革命情勢を充分に發揮することのできない一種のガンであり、早急に切り取らねばならない。すなわち多くの赤軍兵士は、不完全な路線と首尾一貫せぬ革命思想と合法活動ボケによつて主観的にも客観的にも官憲のスペイ要員としての役目を背負わされており、各戦線も敗北の度合いに従つて陣地を縮少せざるを得ず、日本共産党（宮本修正主義集団）から新左翼中間諸潮流にいたる國際改良分裂主義の隊列がますます社会排外主義・反動としての役割を担つてゐる現在、党を帝国主義白色テロ

から守り、蜂起の軍隊を組織するためには、我々の活動は、ロシアボリシェヴィキや都市ゲリラや抵抗運動から生きた教訓を学び、その数倍にも及ぶ非合法的活動の尊守によって着々と進められなければならない。

六九年秋の敗北は、革命軍にとつて重大な教訓であった。その教訓とは、だいたい次の様なものである。まず革命総体の敗北としては、マルクス・レーニン主義による徹底した革命思想の欠除（各種現代修正主義）、革命総路線の欠除（誤った世界認識による誤った戦略・戦術）、権力問題の欠除（敵味方の不明確・力関係についての無知）、革命的時機における不決等々の要因があげられる。そして主要に武装蜂起の敗北に関しては、明確な路線、実際的政策の欠除、戦闘性、武器の不足が、要因となっている。

世間の俗物供には一見「早すぎる蜂起」というものも、一皮むけば、その準備期間の不足（遅すぎる蜂起）だということだ。すなわち遅すぎるということは、蜂起の機関自身に何らかの欠陥があり、定められた目標に到達しないということである。たとえば六九年四月二八日蜂起や秋期蜂起の不決断と敗北にみられたごとく、单一の党としての蜂起への準備がないままに、新左翼内の革命左派統一戦線という甘い夢想にふけり、他党派と官憲の政治的取引きの道具にされたということ。そのことからして党派性の曖昧化を引き起こし、社会排外一国主義・国際改良分裂主義への政治的屈服を強いられ、そこから当然にも最も重要な国際的な活動において「労働者国家左傾化」という改良主義方針が打ち出され、蜂起の機関としての内的・外的規準が崩壊したのであつた。

赤軍内日和見主義者は、「日本の解放はアジアの解放だ」とか「先進国革命は世界革命の要石だ」とか言つてがなりたてているが、その前に現在のインドシナ人民や中国、朝鮮人民や世界各国の革命人民の実践的な革命戦争（言葉の上だけではない）から多くを学ぶことが先である。赤軍兵士は、極左的空文句で自己満足し、一人いい子になり、利口者ぶってはならない。利口なのは、日本プロレタリア人民であり、世界帝国主義に対する全世界の革命的人民である。インドシナ三国人民はその手に武器を持って闘い続けているし、沖縄や本土各基地の軍労働者は経済闘争を闘いつつ武器の使用を学んでいるというのに、赤軍内日和見主義者は何と言

つてゐるのか。ついさっきまで「赤軍を組織しなければならない」と言つていた人々が今では何と言つてゐるのか。彼らはこのように言つてゐる。「共産主義論争に勝利しなければならない」とか、「第二次綱領を作らなければならぬ」とか、「路線転換の過程を明らかにしなければならない」とか言つてゐるのである。これらが、最前衛と称する人々の言葉であり、「解放の要石」の本当の姿なのである。何と恥ずかしいことか、何とバカげたことか。もしも、赤軍兵士が「共産主義論争」や「次期綱領」や「路線転換」に現を抜かすようないふがあるならば、金輪際、革命戦争、正義の戦争などと大言を吐かないことである。

そして今や国際改良分裂主義的傾向を暴露した新左翼中間諸潮流は、その最後の足搔を社会排外主義として露呈した。そこでここに諸党派の裏切りぶりを掲げてみた。革共同について言うなら、その戦略的基盤「反帝反スタ」小ブル観念論に基づきつつ、革マル派の改良主義・組合主義プラス「沖縄解放」中核派の小ブル反戦主義プラス「沖縄奪還」、四トロ国際主義派の「極東革命」・局地戦略主義、プロ軍一派の右翼民族社会革命主義等々は、明らかに権力闘争なき一すなわちプロレタリア独裁の小ブルの歪曲による社会排外主義の元凶として存在しているのである。また共産同諸党派に目を向けるならば、戦旗日向一派の「世界一国同時革命戦略」観念論、戦旗連合派の「スターリン主義打倒、蜂起をめざす单一党建設」、叛旗派「共同体論」、情況派の「市民社会」主義、赤軍派の「過渡期世界論」等々は、完全に革共同「反帝、反スタ」への屈服であり、いくら彼らが「反スタ主義」打倒と叫んでみても、革共同に毛がはえたにすぎない彼らの本当の姿をおおい隠すことは不可能である。統いて構造改革諸派について言えば、革労協は昔ながらの改良主義を小ブル哲学で改作し、共労党は東アジア革命に古里の憧れをいたいでいるし、統社同は共革党への党名変更をするなどして、いよいよ底なしのジグザグ運動をくり返してゐる。これが、現在までの新左翼中間諸潮流のだいたいの裏切り的行為である。

そしてまた、毛沢東思想を主観的に潜称した多くの集団も同様に実践的には国際改良分裂主義の道を歩み、多かれ少なかれエセ毛沢東主義的性格を暴露せざるを得なかつた。我々は、日本共産党（左派）がいくら毛沢

東思想を潜称しようとも、全国各戦線における彼らと日本共産党（宮本修正主義集団）の密月を忘れる事はない。いくら言葉の上で毛沢東思想を祭り上げても、それはかえって毛沢東思想の偉大さを低めることになる。日本共産党左派の場合がまさにそうであり、彼らは日本共産党（宮本修正主義集団）の手先きであり、修正主義の実践的守備隊となっている。彼らと対照的に共産同の手先きは、毛沢東思想をマルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの系列から分離し、反対にトロツキズムやブハーリン主義と和解させようと試みており、当然そこから起つてくる論理矛盾を「土着思想」という農本ファシズム顔負けの観念論を持ち出して反毛沢東思想、反中国共産党的反動的姿を暴露したのであった。我々は、毛沢東思想が普及すればするほど毛沢東思想を手品を使って修正しようとする試みが発生することを一時も忘れてはならない。その他の毛沢東思想研究集団も多くは、毛沢東思想の合法化をはかり、ブルジョア個人主義と金もうけ主義に陥つてしまつてゐる。我々は、日本人民の民主主義的・愛国的・民族的闘争を無視するほどやぶさかでない。我々は、断固民族、民主、愛国闘争を支持するし、それどころかそれらの闘争をより发展させなければならぬとさえ考へてゐる。問題は、革命の敗北と帝国主義戦争を通じた新たな日米帝国主義同盟のもとに開始された戦後革命の性格、民族民主愛国闘争が、中ソ両共産党によつても明らかにされたよう、現代日本帝国主義の發展と軍国主義復活、日米反革命帝国主義同盟の發展強化による世界反革命戦略の前線準備といふ情況のもと、新たな段階のもとに、どのような戦略・戦術を持つかということである。すなわち、各種の民族・民主・爱国戦線をどのようにして国際的反乱に導いていくかが問題なのである。

以上の様な人民内部の矛盾は、直視されなければならないものであり、徹底した革命思想によつて止場されなければならぬものである。マルクス・エンゲルスの「空想的社会主義者」・ラッサール・ブランキーに対する態度、レーニンのメンシェヴィキ・カウツキー・トロツキーに対する態度、スターリンのトロツキー・ブハーリン・西ヨーロッパ社民に対する態度、毛沢東主席の国内戦・革命戦争・文化大革命における態度からして、当然にも我々の態度は、日本共産党（宮本修正主義集団）から新左翼中間諸潮流、エセ毛沢東主義集団

にいたる國際改良分裂主義、社会排外一國主義、第二インター主義、現代カウツキイ主義に対する断固たる党派内戦の貫徹であり、民心を革命の方向を向け、民心から学び、大衆に拝跪せず大衆にたよるという態度である。

日本帝国主義とアメリカ帝国主義を中心とする全ての帝国主義同盟軍に対決する日本プロレタリア人民の闘いは、今凄まじい発展をみせてゐる。全世界帝国主義に対する先進国プロレタリア人民、後進国反帝民族解放人民、社会主義国人民も、今ますます発展し、その國際社会主義プロレタリア同盟の團結、連帶、統一は、ますます強固なものとなつてゐる。農民の反ブルジョア国家レジスタンス・住民の権利の闘争・各種のゲリラ闘争、婦人の地位高上の闘争、各種の企業公害に対する闘争等々の敵対的隊列が、帝国主義戦争といふ野蛮この上なき行為を権力者が準備していることを認識し、彼らに、これに対する唯一の方法を正義の革命戦争と権力奪取として自覚させた時、我々は大軍團を率いて世界に向って言うであらう。「日本革命は世界革命の先進的
一部分である」と。

帝国主義は必ず敗れ、人民は必ず勝利する。

